
たとえ離れ離れになっても

レンタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たとえ離れ離れになるとしても

【Nコード】

N4658I

【作者名】

レントン

【あらすじ】

私には好きな人がいる。でも彼はもうすぐ引越してしまう。

(悲しい……。ねえ、わたしはどうすればいいの?)

私には好きな人がいる。それは同じクラスの真田弘幸君だ。私は高校に入学したときからずっと彼のことが好きだった。1年生で初日から席が隣同士になって、いきなり話しかけられたときの気持ち、忘れられない。今でもそのことを考えると胸がドキドキして、体全体が熱くなる。でも彼は2週間後に遠いところに転校してしまっ
うらしい。

(悲しい。ずっと真田君の顔を見ていられると思ったのに……。一緒に話すことができると思っていたのに……。笑顔を見ることができ
ると思っていたのに……。)

「もおー、ユカ！ どうしたの！？ そんなに落ち込んで」

私は突然友達のサキコに声をかけられてびっくりする。

「わっ、な、なに？」

「だからどうしたの？」

「えっ、いや。別に、何も……」

「もおー、ごまかしたってわかるんだよ、わたしには。ヒロユキ君がもう少し引越しちゃうから、落ち込んでるんですよ」

「そ、それは……」

「ほらー。正直に答える」

「う、うん」

「はい、よくできました。それで、どうするの？」

「どうするって？」

「告白するの？」

「えっ、でもこれから離れ離れになっちゃうのに……」

「そんなの関係ないよ。好きだっていう気持ちはちゃんと伝える。当たり前でしょ」

「でも会えなくなっちゃうんだよ。」

「だからこそ気持ちを伝えないといけないんじゃない。いなくなっ

「ちゃたらそれこそもう何もできなくなっちゃっわよ」

「で、でも……」

「ほら。悩まない、悩まない。ねえ。考える前にまず行動すること。わたしも応援するからさ」

「う、うん」

「じゃあ、決まりね」

「いつ、したらいいかな？」

「それは早いほうがいいわよ。できれば今日とか」

「えっ、きよ、今日!？」

「そう。今日」

「でも、それは心の準備がまだ……」

「もおー、早くしたほうがいいに決まってるでしょ。そのほうが長く一緒にいられるんだから」

「それは、そうだけど……」

「なるべく一緒にいたんじゃないの？」

「いたいけど……。いきなりはちょっと……」

「無理？」

「う、うん」

「じゃないよ」

「えっ!？」

「残されている時間は短いんだから。今できることはすぐにしたほうがいいよ」

「……」

「ほら、もう考えない」

「う、うん」

「じゃあ、席に座って」

「うん」

私は彼女に言われて自分の席に着く。

「何するかは分かるわよね」

「えっ!？」

「えっ、じゃないよ。ラブレターよ、ラブレターを書くに決まっているでしょ」

そう言われて私は机の中からいつか書こうと思ってしまっておいたピンクの便箋を一枚取り出す。

「でも、何て書けばいいの？」

「そうねー。やっぱり気持ちは自分の口から伝えたほうがいいから、どこかに呼び出す手紙がいいかな」

「呼び出す……。どこがいいかな？」

「体育館倉庫の裏とかは。あそこなら誰も来ないし」

「そうだね」

私は水色のボールペンを握り締めて一文を手紙に書いた。

“伝えたいことがあるので、体育館倉庫の裏に来てください。”

ユカより

「んー。なんか回りくどいわね。“体育館倉庫の裏で待っています。”

だけでいいんじゃない」

「そうかな？」

「うん。こういうのはパツと一言で書いたほうがいいのよ。それにそのほうが相手も楽な気持ちで来ると思うし。そのほうがユカも緊張しなくて済むでしょ」

「そうだけど……。それだけで来てくれるかな？」

「大丈夫よ。ヒロユキ君なら」

「そうだね。大丈夫だよね」

「うん」

私はもう一枚便箋を取り出すと、彼女に言われたとおりに書いた。

“体育館倉庫の裏で待っています。”

ユカより

「うん。じゃあ、後はそれを彼の靴箱に入れて待つだけね」

「うん」

私は書いた手紙をピンクの封筒に入れ、ハート型の赤いシールを貼って彼女と一緒に真田君の靴箱に入れた。

(はあー。ドキドキする。胸がはりさそう)
私は今、体育館倉庫の裏で真田君が来るのを待っている。10分ほど経って彼が現れた。私に声をかけてくる。

「何？ 待つてるって」

「わ、わたし……」

「ん」

「わ、わたし、真田君のことが好き!!」

「えっ!?!」

彼が私の言葉に驚いて、二人の間に少し沈黙が流れる。1分後先に口を開いたのは彼のほうだった。

「実は……。俺もユカのことが好きだったんだ」

「えっ!?!」

私は驚いて目を丸くする。

「でもできなかった。これから引越して2度と会えなくなるから」

「わ、わたし、離れ離れになってもいい。気持ちを伝えられたから」

ねえ、だからお願い。好きなら私の気持ちに伝えて……」

「そうだな。俺たちならたぶん離れ離れになっても大丈夫だよな」

「うん」

二人はそのまま互いに近づき抱き合って、キスを交わした。

〈1年後〉

「ユカ。告白して良かったね、あ那时候」

「うん」

「今でもちゃんと連絡、取れてるんでしょ」

「うん。それで今度会いに来てくれるって」

「えっ、それ、本当?」

「うん。ありがとね、サキコ。わたしあ那时候告白できてなかったら、今どうなっていたか……」

「どういたしまして。わたしもユカが幸せそうに嬉しいよ」

本当に離れてしまったら、もう何もすることができない。離れ離れになるからこそ伝えないといけない想いがある。私は彼に想いを伝えることができた。だからたとえどんなに遠くても、心はつながっている。いつ、いつでも、どんなときも……。

〈END〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4658i/>

たとえ離れ離れになっても

2010年10月21日23時37分発行